

景観評価技術の歴史的展開

齋藤 馨*

1. これはイメージです。

この表現を見るようになって久しい。最近では旅行パンフレットの写真にも表記されていた。開花や紅葉のタイミングはもちろん、天候次第で景色の見え方や視程も変わる。雲海だっていつも発生しているわけでも無い。こんな当たり前のことが、絵やイラストなら受け入れられても綺麗な実写写真だと、違いが気になるのだろうか。いや、InstagramやYouTube、TikTokといった最新メディアで頻繁に目にするそれがいつの間にか、いつもそこにある現実と思うのかもしれない。19世紀後半に白黒で音声記録もできない動画撮影が始まった当初、近づいてくる蒸気機関車のモノクロ動画映像(音なし)をスクリーンに投影すると、身の危険を感じて席を立て離れたりする人もいたとされるように、最新技術のメディアに対する写実性感覚は、普及とともに現実とは乖離する。ということですから、時代によって変わっていく。景観の写実性への感覚は、時代やその人の経験とでも変わっていくが、景観評価同様に、同じ写真にたいして6割7割の人が同じような感覚を感じるのであれば、それを「これはイメージです。」と断らなくても良いだろう。6割7割の共通感覚が変化するわけで、それが世代時代や世代、国や地域によるなどだが、コロナ禍も相まって世の中がインターネットを基盤としたオンライン・デジタルの普及とともに、オンライン上には地域・世代を問わず少数部族が乱立し、しかも一人の個人が複数の部族に深淺広狭長短と関わることができるというオンラインな特性もありながら、ある日突然少数部族だったものがバズって圧倒的 majority となったりもする。こんな現象の必然性や成功に方程式を当てて解説したり、それを習って成功するなどは幻で、それこそ「これはイメージです。」だろう。

2. 私の景観評価モデル崇拜時代

1980年代の大学院学生の頃に Shafer (1969)¹⁾の景観写真による評価モデルを参考にして、複数の景観写真をアンケートなどにより特定の評価尺度、例えば「好ましさ」についての評点を得て、一方写真にメッシュをあて、メッシュ毎に写るものを視距離(遠景・中継・近景)と要素(植生・非植生・水・空)に分けて、その数・周辺長などの各種計測値を求めて、好ましさの評点と景観の計測値と関係を統計的に処理することで、アンケートを行わなくても、写真さえあれば景観評価値を計算できるとは「だ」と考えたことがあった²⁾。その後も景観構成要素を厳密に計測し、同じく計量心理学的手法による尺度化した景観評価値との関係性を統計的に処理す

れば、その都度被験者による評価やアンケートをしなくとも、客観的な景観評価が得られと真剣に考えた時期があった。しかし200人、300人のアンケート集計を行うにつれて、その考えは到底無理だと思うようになった。無理と言うよりも間違った考えだと思ったのかもしれない。

フォトモンタージュとアンケート評価結果の関係性を追い求めていたある日、指導教員の塩田が学生の私の席にやってきて印刷されたばかりの塩田(1983)³⁾の別刷の、最後のページにアンダーラインをひいた部分を示しながら『ここはおまえのことを書いておいたぞ』と置いて行かれた(写真1)。その時は、まだまだやってみようということがあるし、さほど気にもせずいたのだった。その後時々思い起こしては、『「もの」を創る』と言うことについて考える癖がついて、今に至っている。

はあり得ない。造園芸術論、トータル・ランドスケープ論は結構であるが、かといって風景を論ずる場合、文明史観の周到な追跡もなしに、簡単なアンケート調査程度のデータから、トータル・ランドスケープの質など評価できよう筈はない。そこで風景評価に接近するアプローチの一つとして、景観構成要素について、「判っているもの」を「判っている範囲」で整理し、その総合化を考えて行くという方策が残ることとなる。われわれは第一に「もの」としての景観を考え、かつ創って行かなければならないからである。

写真1 塩田(1983)³⁾p277左20-28行に塩田加筆

時は過ぎて Burley, J.B.(1997)⁴⁾のVQM (Visual and Ecological Environmental Quality Model)は、私には冒頭の Shafer の Landscape Preference Model を継承したように思え、こうした潮流はこれからも続くだろう。つまり景観評価は永遠の課題のようだが、そのための評価技術は、時代の要請が背景になっていると考えるようになっていく。

読者各位は既にお気づきのように本稿は、私なりの雑多な考えについて話を進めていて、論文のように厳密な引用や証拠を示さない、示せないままであることはご容赦頂きたい。

3. シーン景観把握モデル

国内において景観把握モデルとして最も有名なものが「シーン景観把握モデル」⁵⁾だろう。これは篠原修によるもので1976に提示され当初は視対象が主対象1つだったものが、副対象が付け加わり1982年に完成している。その経緯は知らないが、瀬戸内海国立公園の景観資源と巨大な人工物である橋とを視対象として扱うためだったのだろうと推察する。

このシーン景観把握モデルの模式図には海と山(島)、橋梁が描かれているが、本州四国連絡橋の着工が1975年であることから、そのルート選定や構造検討などはそれよりもずいぶん前から準備さ

* 東京農業大学・地域環境科学部・造園科学科

れ、4ルートが3ルートに減少変更されるなどした。瀬戸内海国立公園内に建設される当時東洋一の吊り橋だったが、例えば明石海峡大橋の主塔は海面上約300mと巨大な構造物となるが、これが建設前は公園内に計画され、間違っているかもしれないが、建設後は普通地域に接する地域外となっている。厳密さはともかく、巨大な人工構造物である本州四国連絡橋が自然公園内を通過するとなれば景観影響はどうかの議論されたはずで、そうしたなかで景観評価はどうかの注目が検討される中、土木橋梁(美学)を系譜にシーン景観把握モデルが提唱されたのである。開発は景観破壊だとされる側が巨大な橋梁と自然景観との関係性を考究したのだと思う。

視点・視点場と対象・対象場があり、視点場と対象場の境界があってこれらの関係性を検討するためのモデルであるが、視点場の英名を Landscape here, 対象場のそれを Landscape there とし、この here と there の境界を意識させることがこのモデルの肝だと私は考えている。しかし近年視点のことを「視点場」と表現することが大多数であるが、実はそれは当時はそのようではなかったし、自然景観と巨大橋梁との調和的な関係性の検討のために「自然場」「対象場」が景観要素として提唱され、モデル化されていたのである。

このモデルの、本四架橋での一番の成果は、巨大な吊り橋が美しく眺めとして見る視点が、橋梁美を感じるには橋全体を真横から眺めて橋梁の全体像を眺めることでは無く、むしろ橋の路盤より上で、どちらかの橋のたもとから斜め上から見る景観が、瀬戸内海の多島海(自然)景観との関係性が美しいことを発見した事なのである。だからこそのモデルの模式図はまさにそのように橋が描かれているのだろう。

4. 眺望景観圍繞景観

眺望景観圍繞(いによろ)景観は塩田(1967)⁶⁾が示した景観要素である。1956年に制度化された国民宿舎は自然公園や国民保養温泉地に建設された宿泊施設で国民全般が低廉にレクリエーションと保健休養に利用できる宿舎であり、また自然公園内、国立国定公園内の集団施設地区内に国民が同じく低廉に自然レクリエーションを楽しめる施設として国民休暇村の整備が1961年より始まっている。いずれも林業など生業の場としての森林にたいして、全国民の保健休養に資する自然地の利用が始まる中で、自然風景地の保護と利用を計画し管理実行することが求められ、そこに眺望景観圍繞景観を生み出したのだろう。塩田のこの景観モデルは圍繞眺望で知られるが、その中身は広大な自然風景地をメッシュアナリシスにより様々に把握するなかで、複数の主題図をオーバーレイする事に加えて、視点周囲の3次元的な空間からなる圍繞景観と2次元絵画的に見える眺

望景観からの評価を、メッシュアナリシスの主題図に組み入れて分析しているのである。

自然風景地の中で広く国民が保健休養、観光レクリエーションを宿泊施設を利用しながら体験することは、つまりは面的な土地の広がり計画であり管理なのだが、そこには2次元地図的な土地の広がりを、景観という3次元像で評価することを入れ込む必要があり、それが圍繞眺望景観という大括りにして景観モデルとして提唱されたのだろう。

5. その後の景観評価

篠原のシーン景観把握モデルの後には、景観評価モデルはめばしいものは無いと思う。1. で触れたVQMがVisualとEcologicalを組み合わせているが、Visualに視距離という3D景観要素があり、Ecologicalはそれが生物多様性であろうが、技術的にはGIS(Geographical Information System/Science)を活用する、つまりは地図情報を空間解析して評価するもので、塩田のモデルの全体像に近いと感じる。

「視点場と対象場の境界、つまり here と there の境界がどこにあるのか、どこにするのか、これを操作することが景観操作であり、一番操作性の高いのが視点場で景観デザインの要なのだ」ということを篠原から聞いたことがあって、このこともずいぶんと考えてみた。操作するのが景観デザイナーで、日本庭園ならば庭師がそれだ。一方で保健休養体験をする自然風景地利用者にとっての境界がどこなのかは、本人次第であってそれすら意識しないはずだが、本人のその時の感覚知覚に従い自ずと「こっち here」と「あっち there」が決まるように思う。それすら時々刻々と境界が動くので、本来は自在に動くと考えべきである。そこには見る主体の側の感覚知覚、さらには感じ方や評価が入っているので、これを景観要素に分けて分析した視対象の像に帰着させることに無理がある。

オンライン・デジタルな要素が景観評価、特に個人個人の感覚の中に占める割合が高くなる傾向の中で、もはや景観把握モデルが必要となるのかは私にはもはや分からない。

これは次世代に期待する。

補注及び引用文献

- 1) SHAFER, E. L., et. al. (1969): Natural Landscape Preference: A Predictive Model: Journal of Leisure Research Vol.1, No.1, 1969
- 2) 斎藤馨(1985): 写真による景観評価特性と既存評価モデルとの関連について: 造園雑誌: 48(5): 246-251
- 3) 塩田敏志(1983)環境情報処理と造園計画-景観デザインにおける電算機適用の展望-, 造園雑誌, 46(4), 270-277
- 4) Burley, J.B.(1997) Visual and ecological environmental quality model for transportation planning and design. TRR: J. Trans. Res. Board (1549), 54-60. <https://doi.org/10.1177/0361198196154900107>
- 5) 篠原修(1982): 土木景観計画: 新体系土木工学 59: 技報道出版: pp326
- 6) 塩田敏志ほか(1967): 自然風景地計画のための景観解析 II: 観光: 16: 63-39